

正福寺地蔵堂 国宝/東村山市

正面遠方に正福寺山門が見える



ここが正福寺



右手の方には八坂神社の鳥居がある



「国宝 金剛山正福寺 千体地藏堂」とある







正面が地藏堂



中国のスタイルをそのままの形で日本に確立することを目的とし(一向の唐様)、宋僧蘭溪道隆の来朝と建長寺建立によって実現されたもので、建築様式も折衷を排除し、中国禅宗様式のスタイルが純粹に、ストレートに表現された代表例という



一般的には屋根の反りは中国が最も反っていて、韓国は中間、日本のが最も少ないといわれているそうだが、美的感覚の相違であらうか/天に向かって反り上がるこの反りのかたちの中には、武士階級が新しい時代に求めた力のイメージが象徴されていて、そのエネルギーが造形の力となっているのではと考える人もいるようだ

下層の屋根は裳腰





この地蔵堂は室町時代の1407年建立とされており、姿、形、大きさなど大変よく似ている円覚寺舍利殿も1563年の同寺大火後、室町時代中期建築とされる太平寺の仏殿を移築したものとされるという



正福寺地蔵堂は昭和8～9年(1933～1934)の復元解体工事の祭に発見された尾垂木尻持送りの墨書銘から、室町時代の応永14年(1407)の建立であると推定されているという

上層の屋根は扇垂木になっているのが分かる/頭貫・飛貫・内法貫で固められた貫構造となっている



円覚寺舎利殿よりも強い反りという/妻飾りは蕪懸魚(かぶらげぎょ)、虹梁大瓶束



禅宗様の組み物は、大斗が柱の径より小さく、組み物全体が和洋よりも小さいため、組み物が一つの塊のようにになっているという



和様に比べて肘木がより円弧であることや尾垂木が細く、反っていて先が尖っているなど、微妙に違うところが幾つかあり、肘木の積み重ねで手前に飛び出た肘木がもう一手横に広がる場所は禅宗様の特徴であるという

柱の粽と棧唐戸



詰組、花頭窓と礎盤



弓欄間と藁座



2. 正福寺地藏堂

正福寺地藏堂については、「千体地藏菩薩略縁記」（享和二年（一八〇二）か？）に「当寺仏殿の如くなる堂ハ鎌倉円覚寺舍利殿 濃州 虎溪山の外更ニなし」、『新編武蔵風土記稿』（文化七〜天保元年（一八一〇〜三〇））に「其結構のさま普通の堂とは大にことなり、問はずして故ある堂とはしらる、」、『遊歴雜記』（文化十一年（一八一四））に「希代の異作にして今に存じ一切の大工来り地藏堂を見て細工の規矩模範とをり」と、江戸時代後期には由緒ある名建築として知られていた。しかし日本の禅宗様建築史上、正福寺地藏堂の持つ価値が広く知られるようになったのは、昭和に入ってからのことである。

昭和二年（一九二七）十月、東京府史蹟保存物調査で稲村坦元氏（東京府）と田邊泰博士（早稲田大学）によって、正福寺地藏堂が発見され、翌三年一月十五日東京帝国大学教授で文部省の委員であった関野貞博士が地藏堂を視察し、同四年七月一日に国宝指定された（詳細は正福寺略年表参照）。当時、円覚寺舍利殿によく似た建物が、東京で発見されたことは極めて大きな出来事であった。

そして、昭和八〜九年（一九三三〜三四）には解体修理工事が行われ、東京府知事宛の竣功届「国宝正福寺地藏堂修理工事竣成報告書（実施仕様書及精算書ヲ含ム）」が作成された。修理監督は大滝正雄まさお、同助手が吉田種次郎よしたねじろう、上田虎介あげたとらすけ、斉藤小四郎さいとうしろう、高端正雄たかはしまさおの各氏で、大工棟梁は佐々木嘉平氏ささきかへいであった。この解体修理とそれに伴う調査はレベルの高いものであったが、当時は報告書刊行が通例ではなかったため、残念ながら筆稿のまま保存され、その内容はほとんど知られることがなかった。公となったのはその後、東村山市史

編纂事業に伴い、『国宝正福寺地蔵堂修理工事報告書』（一九六八年）が刊行されてからのことである。鎌倉時代の代表作とされていた円覚寺舍利殿（二五頁参照）に正福寺地蔵堂が酷似していたため、正福寺地蔵堂の建築年代は国宝指定時には鎌倉時代とされていたが、この報告書刊行により、応永十四年（一四〇七（室町時代））に下げられることとなった。

そして、その後の研究により、円覚寺舍利殿も鎌倉時代の建築ではないことが玉村竹二博士^{たまむらたけじ}によって明らか^{あきらか}にされた（文献上より見たる円覚寺舍利殿『国宝円覚寺舍利殿』神奈川県教育委員会 一九七〇年）。すなわち、永禄六年（一五六三）の同寺大火後、室町時代中期建築と推定される太平寺（鎌倉尼五山・廃寺）の仏殿を移築したものだ^たったのである。このように、建築史上著名な諸学者の眼をも狂わせた禅宗様建築とは、一体どのようなものなのだろうか。

建築的特色

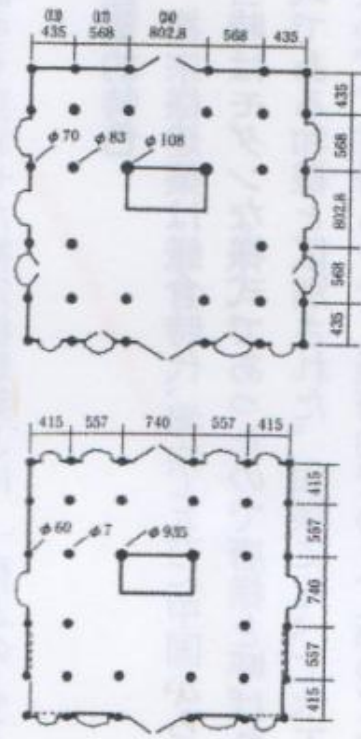
禅宗様建築は鎌倉時代、禅宗と共に中国から伝わった建築様式で、当時はモダンな様式であったので唐様と呼ばれ、それまでの伝統様式である和様と区別された。和様に比べて木工が主で、瓦や土壁も使わず、材料も少なく経済的であり、極めてシステマチックな技法だったことから急速に広まり、和様建築にも強く影響を与えた。

正福寺地蔵堂は、禅宗様の方三間^{ほうさんけん}裳階^{もこしつぎ}付^も仏殿^{ぶつでん}である。方三間とは、正面と側面の柱と柱の間^{あいだ}がそれぞれ三つある方形の建物のことで、柱間の寸法は均一ではない。その外側に裳階と呼ばれる空間が付く形式である。上層屋根は入母屋造^{いりもやづくり}の柿葺^{こけらぎ}で、下層屋根は板葺^{いたぎ}（現

在は上に銅板が葺かれる) となつている。上層屋根の隅反りが強いのは禅宗様建築の特色で、垂木が放射状に配列される扇垂木となつている。中国や朝鮮では古代から扇垂木が一般的であつたが、日本では飛鳥時代以後途絶えてしまつていた。その屋根は野屋根と呼ばれる小屋裏で構成され、下から見える扇垂木は化粧垂木で、実際に屋根の柿葺を支えるのは地垂木である。その懐に桔木と呼ばれる材が入れられて、軒先を支えている。このようにして軒先を出す手法は日本で生まれたものなので、禅宗様は単に中国のコピーではなく、そのシステムを取り入れたものであつたことが分かる。軒下の三手先組物は、柱上の台輪上に等間隔で並べられて屋根を支えている。

和様に比べて柱の径が細いことと、柱の上下に付けられた粽によつて縦のラインが強調されており、その根元には礎盤が入れられ緊張感があるため、外観上すつきりと見える。柱には数段にわたつて貫が通され、籠のような強靱な構造となつている。そしてその貫には縦板壁が張られている。その壁に付く、花頭口と花頭窓の枠には線形の曲線が施され、棧唐戸の組子は唐戸面で軽やかである。内部に入ると、弓欄間からもれる光で、堂内には柔らかな明るさがある。床はタタキで、壁や柱、天井に彩色や絵画のない素木造りで、清楚な空間である。上を見上げると、堂外側から内部に延びる尾垂木と呼ばれる斜め材が扇垂木と共に、本尊の木造地藏菩薩像の真上に造られた鏡天井を支え、求心的な空間を構成している。柱に架けられた大虹梁と大瓶束はその天井を支え、それを身舎柱が受け、裳階柱の上の海老虹梁へとつなげられている。大虹梁には下

面に錫杖彫、側面下に欠眉、その両端には袖切眉が施され、大瓶束の根元には結綿と呼ばれる装飾が付く。また木鼻や拳鼻、持送には渦文の絵様と線形が施されている。いずれも、禅宗様建築の特徴である。



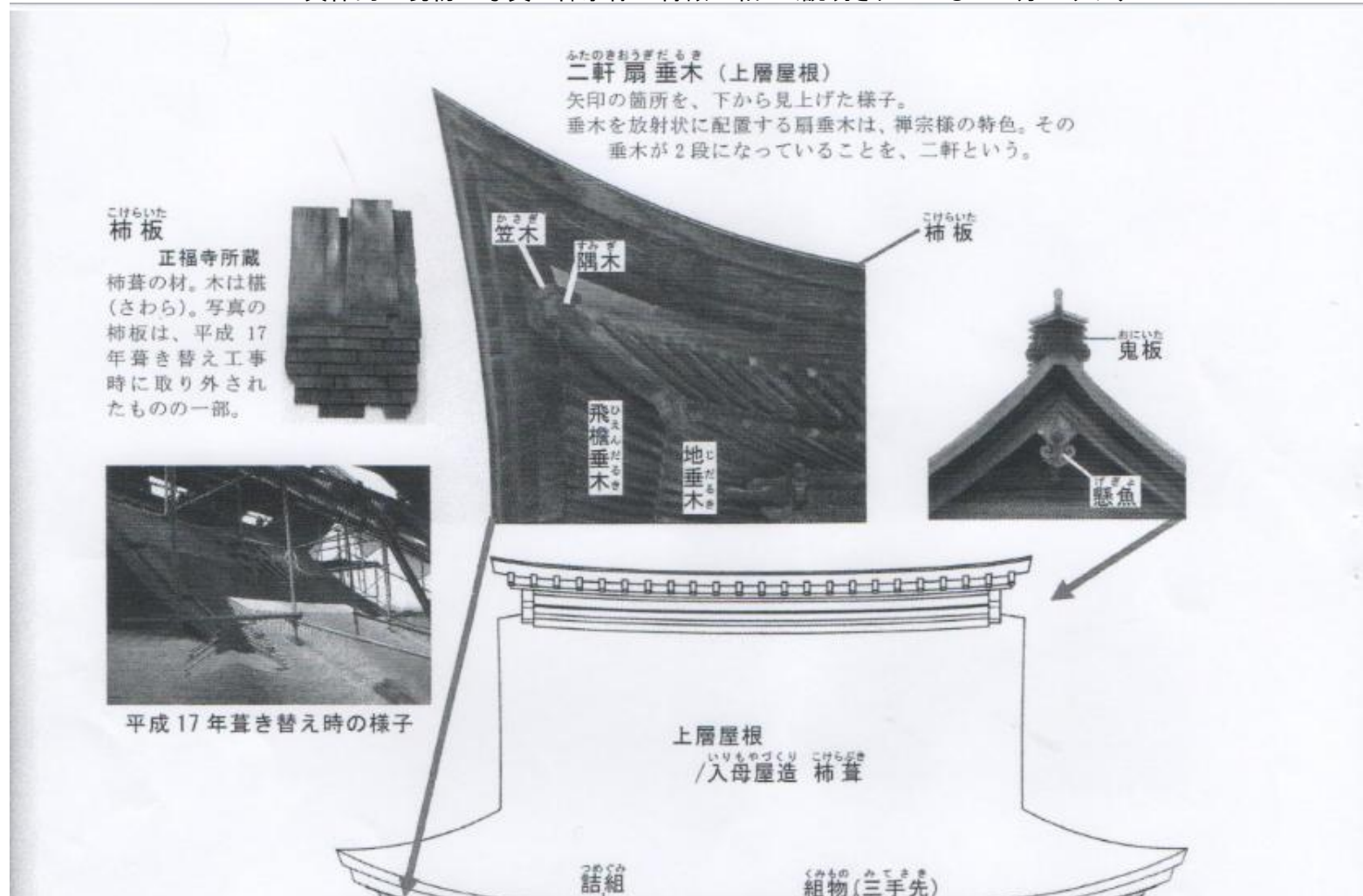
平面図比較
 上・正福寺地藏堂、下・円覚寺舍利殿。平面図からも、ほぼ同規模の建物であることが分かる。
 (全集日本の古寺第2巻『鎌倉と東国の古寺』118頁 中世禅宗様仏堂平面図より)

仏殿の規模

現存する中世禅宗様建築の規模と、その建物が属していた寺院の寺格の比較研究により、方五間裳階付仏殿は五山の寺院、正福寺地藏堂や太平寺仏殿（現在の円覚寺舍利殿）等の方三間裳階付仏殿は諸山およびこれに次ぐ禅宗寺院、高倉寺観音堂（二四頁参照）等の方三間仏殿以下のものは一般禅宗寺院の建物であったと、推定されている。すなわち、五山制度（二頁参照）に基づき建物の規模もある程度規定されていたと思われる。このことから、正福寺は地藏堂建立時にはそれなりの規模と格式を備えた寺院であったことが予測されるが、今のところそれを裏付ける資料は発見されていない。

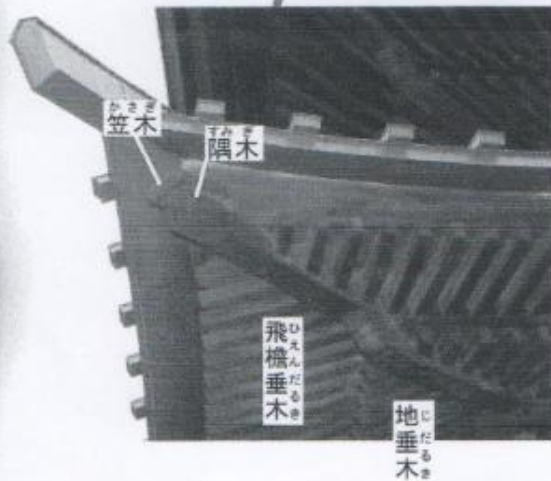
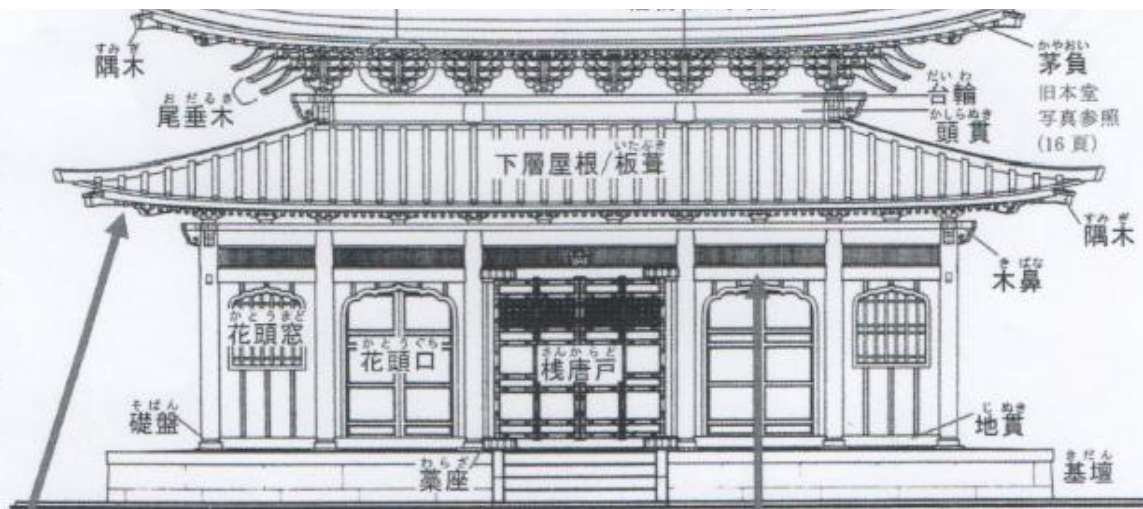
建立当時の中世禅宗様建築で方五間裳階付仏殿は、現存していないものの、建長寺と円覚寺の指図（建長寺指図・元弘元年（一一三三）一）、円覚寺仏殿指図・元龜四年（一一五七二））が伝わっている。その

具体的に現物の写真で禅宗様の特徴が細かく説明されているので分かりやすい

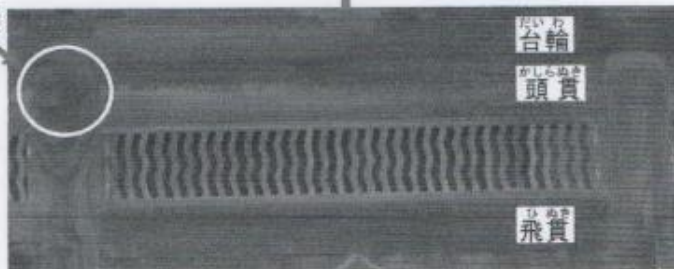


ふたのきへいこうたるき
二軒平行垂木
 (下層屋根)

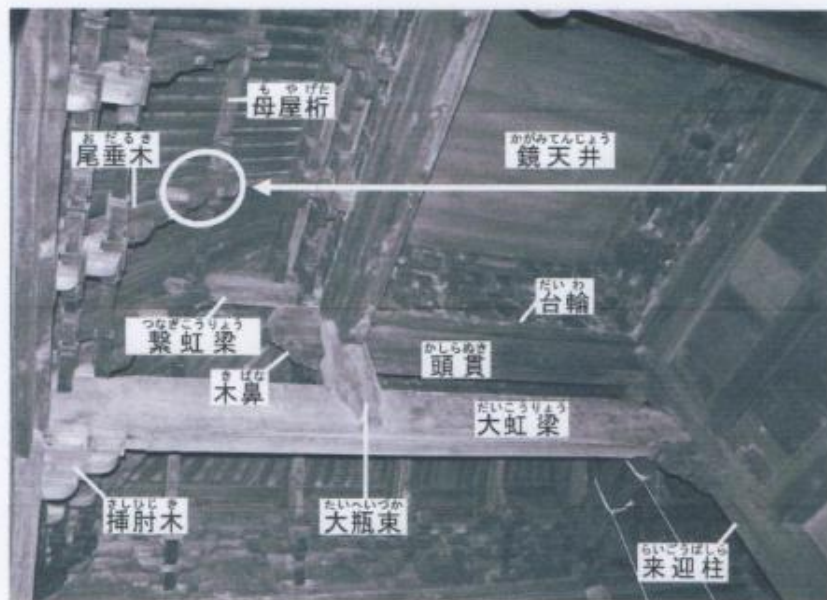
垂木を平行に配置する平行垂木は、和様の特色だが、裳階の軒は平行垂木であることが、通例。板葺(厚板葺目板打ち)であるが、昭和8~9年の解体修理工事以降、保存上、銅板がかぶせられた。



粽
 柱の上部が丸く細められている。
 長く見える効果がある。

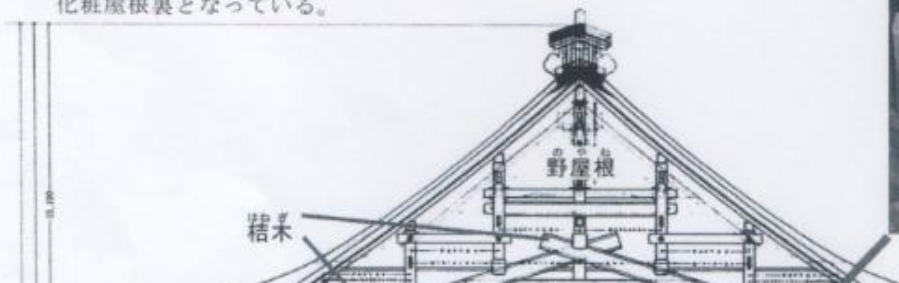


ゆみらんま
弓欄間
 禅宗様建築の特色。装飾的な堂内の明かり取りとなっている。



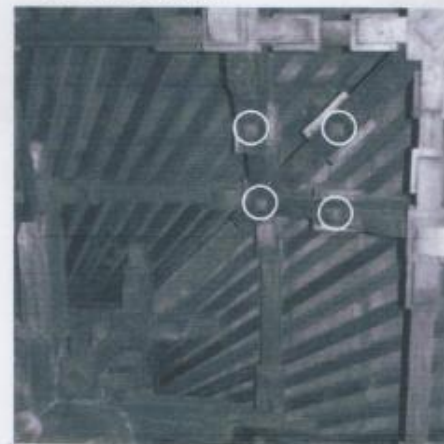
内部架構

内部から天井を見上げた様子。天井を張らず、垂木等の構造物を見せる化粧屋根裏となっている。

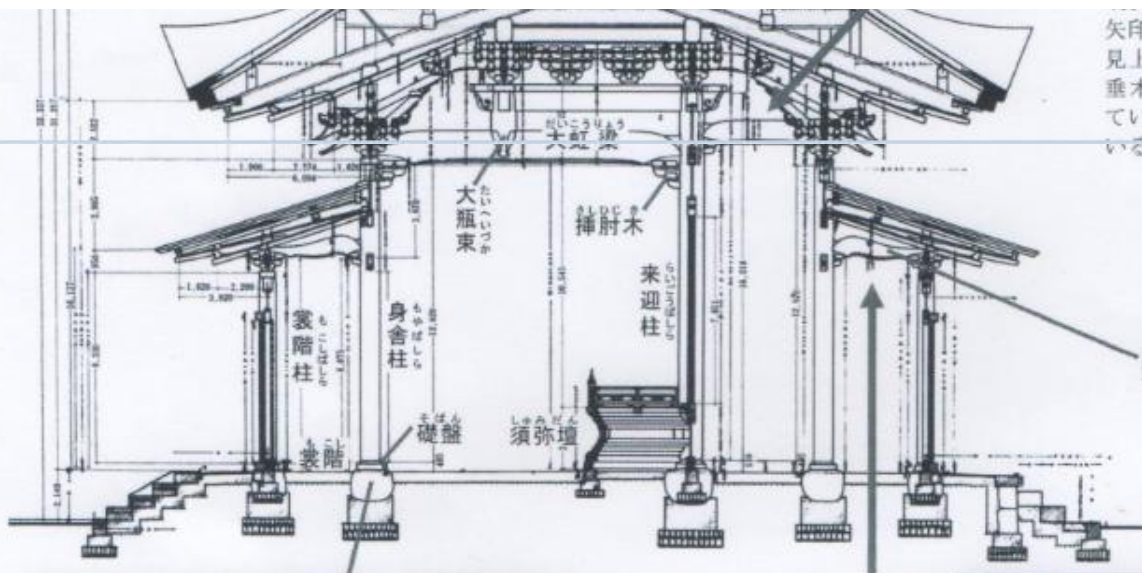


おだるき白丸囲みもちあくり 尾垂木尻持送

白丸囲み部材（上と下の写真）のこと。どの箇所かは不明だが、この部材から地蔵堂の建立年を示す墨書銘が見つかった（21頁参照）。



おうぎだるき 扇垂木



矢印の箇所を、下から見上げた様子。垂木が放射状になっている。内部で見えているのは、地垂木。

海老虹梁



昭和8~9年の解体修理工事時に、取り外されたもの。正福寺所蔵

礎盤

四半敷（瓦）で、礎盤が石製であることが一般的だが、正福寺地蔵堂は、タタキで礎盤が木製となっており、素朴なつくりとなっている。

平行垂木
垂木が平行になっている。内部で見えているのは地垂木で、その垂木の奥に見える板張り
は、化粧裏板（二〇頁参照）。



隅木

いくつもの説明板がある





正福寺千体地藏堂本尊について
正福寺千体小地藏尊像について

<http://risshi.life.coocon.jp/cubkh1602.html> 説明板
<http://risshi.life.coocon.jp/cubkh1603.html> 説明板



赤い屋根の覆屋があった





川の「橋」としても使われていたという都内最大の1349年の板碑(板石塔婆)

東村山市指定有形民俗文化財

貞和じょうわの板碑いたび

所在 東村山市野口町四丁目六番地一
指定 昭和四十四年三月一日

この板碑は都内最大の板碑といわれ、高さ二八五cm(地上部分二四七cm)、幅は中央部分で五五cmもあります。

碑面は釈迦種子に月輪、蓮座を配し、光明真言を刻し、銘は「貞和五年丑卯月八日、帰源逆修」とあり西暦一三四九年のものです。

この板碑はかつては前川の橋として使われ、経文橋または念仏橋ともよばれていました。江戸時代からこの橋を動かすと疫病が起きると伝えられ、昭和二年五月に改修のため板碑を撤去したところ付近に赤痢が発生したのでこれを板碑のたたりとし、同年八月に橋畔で法要を営み、板碑をここ正福寺境内に移建したものです。

昭和六十年十一月

東村山市教育委員会

上部



下部



併設されている八坂神社





八坂神社の仮宮という



正面は本堂



帰路に就く



もう一度、地藏堂の屋根の大きな曲線を仰ぎ見る



日本にもこんなに大きな反り上がりが流行った時代があった



「隅の反り出し(茅負の反り出し)」の手法が使われているという



